

平等な子育てに向かって

—“夫婦で育児”の四類型—

船橋 恵子

＜ キーワード ＞

ジェンダー秩序、ジェンダー契約、父親、母親、育児、家族

＜ 要 旨 ＞

父親の育児参加はどこまで家族におけるジェンダー秩序を変革しうるだろうか。10歳以下の子どもを一人以上持ち、父親がよく育児に関わっている17組のカップルに対して、インタビュー調査を実施した。その結果、職業と家族ケアの性役割配分の視点から、基本的四類型を抽出した。Aタイプ（新保守主義的家族）は、母親が主なケア役割を担っており、父親は時々助けている。Bタイプ（移行期家族）は、両親とも職業を持ち、家事も分担しているが、母親の家事負担が父親よりも重い。Cタイプ（平等主義家族）は、両親ともに職業と家事をほぼ平等に担っている。Dタイプ（ラディカルな家族）は、性役割が逆転しており、女性が稼ぎ手で男性がケアラーである。A～Dタイプまでの語りを分析した結果、ジェンダー秩序は、あらゆるところで作動しており、幸福な家庭、社会的成功、よりよい生活といった様々な男性の願望を優先するように働いている。反対に、女性はパートナーの男性に従って自分自身の願望を調整するように期待されている。しかしながら、女性がパートナーの男性と交渉することは重要で、カップル間の新しい均衡をもたらさう。それを「ジェンダー契約」と呼ぶことができる。

1. 次世代育成の今日的方向と本稿の主題

現代家族をめぐる議論の中で、現在、父親の育児参加ほど肯定的に受けとめられているものはない。次世代育成は、閉じられた家族の中で母親だけで行いうるものではなく、保育・教育システムや育児ネットワークの整備、育児費用の社会的再配分といった育児の社会化とともに、保育職への男性参入や父親の育児参加が必要だという認識は、この10年ほどの間に広く共有されるようになってきた。日本における母親像・父親像の（理念としての）変化について、宮坂靖子は、1970年代は母性強調の時代、1980年代は母性神話への懐疑と抵抗の時代、1990年代は父親の再発見と男女による共同育児の時代と整理している（宮坂2000）。特に、1980～90年代の先駆的な父親研究（大日向1987、柏木1993、牧野1996）は学問的基礎を提供し、それに低出生率を背景とする育児支援政策の主流化も後押し

して、今や、政府から市民運動まで、保守派から革新派まで、「父親の育児参加」を唱えている。

男性の意識も、急速に変化している。育児期の子どもを持つ男性の約半数が育児休業取得を希望しているという（佐藤、武石2004）。また、2004年1月に筆者の参加する文部科学省科学研究費プロジェクトで実施した男性意識調査の結果（未刊）でも、予想以上に高い男性の育児参加志向が捉えられている。もっとも意識の変化であって、実行が伴っているわけではないが、注目すべき傾向であろう。

これは、もちろん歓迎すべきことである。今後も、育児に関わりたい男性が職業生活と育児責任とを両立しうような社会システムの設計について、もっと研究が進められてよい。筆者も、フランス・スウェーデンの例を参考にしながら、両性が職業と私生活を両立できる社会のあり方を求めて、調査研究を続けている。

じつは、本稿の主題はその先にある。たしかに、父親の育児参加は子育てをめぐる状況を改善するだろうけれども、いったいどこまで「ジェンダー秩序」¹⁾を変革するのであろうか。父親の育児が普通に肯定されるようになった今こそ、一歩立ち止まって、そのジェンダー効果について細密な分析が必要なのではないだろうか。ちょうど、スウェーデンなどで女性の就労継続が一般化するにつれて、性別職域分離のような職場に内在するジェンダーが問題化するように、男性の育児が一般化していけば、家庭に潜在する新たなジェンダーが見えてくるに違いない。

両親が子育てをよく分かち合っている家族は、どんな問題を抱えているのだろうか。そして、それらの問題とどのように折り合っているのだろうか。父親の育児参加に水を差すためではなく、父親の育児参加の向かうべき方向をしっかりと見定めるために、“夫婦で育児”の経験をジェンダー分析することが必要なのである。そこで析出されるジェンダーは、おそらく、現在の男性の意識変化にもかかわらず実行率を停滞させている要因と重なる部分があると予想されるからである。

2. 方法とデータ

このような研究テーマには、統計的調査よりも質的な調査が適する。意識は変化していても実行率は低いので、大量サンプルの統計分析では、具体的な細かいリアリティーを拾い出すことが難しいからである。

1999年に丸一年かけて、筆者は、日本・フランス・スウェーデンの三カ国において、育児に積極的に関わっていると自認している父親とそのパートナー（計47組）にインタビュー調査を行った。その詳細な比較分析については近刊別著にゆずることとして、本稿では、日本のデータ（17組）に限定して、父親の育児参加のレベルやタイプ、育児のシェアが孕んでいる問題や傾向などを、ジェンダーの視点から分析する。

本稿で取り上げる日本のデータは、1999年5～6月に東京と神奈川で収集した。まず、調査協力者を、10歳以下の子どもを少なくとも一人持ち、育児をよくシェアしているカップルという基本条件で、地域のネットワーク・リーダーや保育所園長などに紹介を依頼したほか、講演先で呼びかけたり、「男も女も育児時間を！ 連絡会」のメーリング・リストで呼びかけたりして、ひとつひとつ求めていった。

スタート時は基本条件以外は無条件にカップルを選

んだが、しだいにインタビューを重ねていくにつれて、職業や学歴、階層、居住地域などの社会的諸条件がサンプル全体として多様性を持つように配慮しながら、協力者を選んでいった。短い調査期間で時間的制約もあったが、ジェンダー分析にとって基本的な類型を構成するために、得られた17ケースで充分と考えられたので、一区切りをつけた。

インタビューは、関心を示してくれたカップルにあらかじめ調査趣意状を送り、調査の目的や方法、録音などの了解を得た上で、原則として協力者の自宅を訪問させてもらい、カップルの双方が同席して（時には子どももそばに居る中で）、2時間程度の半構造化面接を行った。主な質問項目は、家事・育児の分担、家族観、父親と母親の役割についての意見、職業生活と家庭生活との両立戦略、日本の育児支援政策についての意見などであるが、ケースによっては自由に話題が広がっていった。その他、カップルの社会的基本属性を知るためのフェイスシートにも記入してもらった。後で、録音テープは起こし、フェイスシートのまとめとともに、ケースごとのデータ・ファイルを作成した。

このようなインタビュー方法は、おのずと限界を持っている。まず、インタビューを受諾してくれる時点で、家庭生活が比較的うまくいっているカップルに限られただろう。また、双方の同席により、お互いに聞かれては困るようなことは言わないことになる。長期にわたる参与観察や、夫婦別々にじっくり話を聞くような調査の持ちうる「深み」は、はじめから断念している。しかし、もともと国際比較調査であった背景もあり、聞き取りの深さを捨てても、典型的認識を構成するだけの多様性に関わる基本データを得ることができたのではないかと思う。

3. “夫婦で育児”の四類型

父親の育児参加度が高く、夫婦で共に育児に取り組んでいると自称し、あるいは他薦されたカップルから次々と話を聞かせていただくうちに、筆者はしだいに、“夫婦で育児”というリアリティーの全体像が、じつはいくつかのジェンダー・タイプに収斂していくことに気づいた。そのようなジェンダー関係の違いを規定する最も基本的な変数は、やはり母親の就労状況であり、母親の家計貢献率であった。

そこで、まず17ケースのうち、母親が就労していないかあるいは極めて短時間の就労をしているケース



(妻の夫への経済的依存率が高いもの)を選び、Aタイプとした。次に、就労に関するカップルの役割関係がAタイプの逆であるケースを選び、Dタイプとした。Dタイプは、母親が主な稼ぎ手であり、父親が家事育児の相当部分を担っている。残りのケースはすべて共働き夫婦であるが、この調査の前提から、育児はある程度共有されているので、特に家事に注目して、「平等な家事分担」をしているケースをCタイプ、「不平等な分担」になっているケースをBタイプとした²⁾。

このように、客観的な指標によって多様な事例をひとまず四類型として整理してみると、「夫婦で育児」というリアリティの基本的な枠組が浮かび上がってくる。ここで、ケースのタイプ別一覧(表1)を示すとともに、四類型の基本特性について述べよう。

Aタイプにおいては、母親が家事・育児の主力を担っており、父親はそれを時々手助けしている。母親は、専業主婦であるか、仕事を持っていても短時間であり、仕事へのアイデンティティは弱い。育児が最優先され、子どもが小さいうちはフルタイムの仕事はできるだけ避けて家にとどまることを選んでいる。妻の夫に対する「経済的依存度」は高く、夫の妻に対する「家事依存度」も高い。育児は比較的良好に共有されているが、家事分担の内容は限られている。

Bタイプは、夫婦ともに職業を持ち、家事・育児も分担しあっているが、母親の負担が父親よりも重い。

このタイプの母親は、生涯継続する職業を持ってはいるが、しばしば家族のニーズに合わせて自分の仕事を調整している。例えば、仕事を短縮したり、キャリアをあきらめたり、自分自身の興味関心を後回しにする。父親の方は、非常時には家庭責任を果たすが、ふだんは長時間労働で家庭に不在のことが多く、家事・育児の中心部分を妻に依存している。家事分担の内容も限られている。

Cタイプは、夫婦ともに職業を持ち、家事・育児もほとんど平等に分担している。互いの経済的依存度も家事依存度も低い。日本の事例では、このタイプの妻のほとんどが、高学歴の専門職であり、みずからの職業に強いアイデンティティを持っていた。また、仕事と家庭の間で厳しい時間の綱渡りをするのは、妻だけではなく、夫も同様にいろいろな工夫をこらしていた。

Dタイプにおいては、性役割が逆転している。父親は、何らかの事情で仕事を辞め、家族の扶養を妻に頼る代わりに、主体的に家事・育児を担当している。このタイプの妻も、ほとんどが高学歴の専門職で、みずからの職業に強いアイデンティティを持っているため、夫の申し出を受け入れて、家事・育児を彼に任せる選択をした。しかしながら、Dタイプの父親は、必ずしもずっと専業主夫でいるつもりではなく、アルバイトや勉強、職探しをしていた。とは言え、ジェン

表1 “夫婦で育児”の四類型

タイプ	ケースNo.	妻-夫年齢	妻学歴	妻職業	妻労働時間(通)	妻家事時間	夫学歴	夫職業	夫労働時間(通)	夫家事時間	世帯年収	E. D.	H. D.	子年齢
A	J 1	44-45	専門学校	洋裁師	2(0)	2	大学	地方公務員	8(15)	0.5	800	0.88	0.6	10, 7
A	J 2	43-47	短大	主婦	0(0)	5	大学	設計技師	12(120)	0	740	1	1	10, 8, 5
A	J 7	34-34	高校	主婦	0(0)	3	中学校	会社員	7.5(20)	0	850	1	1	11, 7, (0)
A	J 11	41-42	高校	パート職員	1(0)	2	大学	公務員	9(120)	0.5	900	0.66	0.6	8, 3
A	J 15	30-36	大学	主婦	0(0)	4.5	大学	消防士	10(100)	1	750	1	0.64	3
A	J 17	30-31	短大	牧師夫人	0.4(0)	4	短大	牧師	8(0)	0.5	300	1	0.78	1
B	J 4	40-43	大学	中学教員	9(40)	3	大学	中学教員	11(30)	0.5	1300	0	0.71	9, 6
B	J 9	36-35	大学院	薬剤師	10(40)	1.5	大学院	企業研究職	10(200)	0.5	1300	0.31	0.5	4, 1
B	J 14	37-37	短大	自営事務等	7(0)	6	高校	自営印章業	10(0)	1	700	0.28	0.71	11, 1
B	J 16	35-35	大学	高校教員	8(70)育休	2.5	大学	高校教員	8(20)	1	800	0	0.43	4, 0
C	J 6	32-32	大学院	企業研究職	8.1(150)	2	大学院	企業研究職	8.3(170)	2	1400	0.08	0	5, 2
C	J 8	32-32	大学	福祉職員	9(50)	2	大学	会社員	9(90)	1.5	1000	-0.1	0.14	2
C	J 10	35-45	大学	カウンセラー	10(240)	2	専門	カウンセラー	8(120)	2	1200	0.08	0	3, 0
C	J 12	29-30	大学	高校教員	9(120)	3	大学	会社員	9(90)	2	1000	0.1	0.2	2
D	J 3	30-31	専門学校	助産師	8(60)	0.1	大学	アルバイト	不定(120)	5	600	-0.84	-0.96	0
D	J 5	37-37	大学	SE	10(90)	4	大学院	臨床心理士	非常勤(90)	5	900	-0.66	-0.11	5
D	J 13	31-35	大学	出版社勤務	7(120)	1.5	短大	アルバイト	不定(5)	2	500	-0.8	-0.14	0

注・ケースNo.はインタビュー順
 ・労働時間の単位は時間
 ・(通)は通勤時間で単位は分
 ・世帯年収の単位は万円

・E. D. = (夫の年収 - 妻の年収) ÷ (世帯年収)
 妻の夫への経済的依存度を表す(三具 2002 参照)
 ・H. D. = (妻の家事時間 - 夫の家事時間) ÷ (総家事時間)
 夫の妻への家事依存度を表す

表2 性役割配分の論理的枠組における四類型の位置

(↑→ジェンダー・ベクトル)		母親の役割		
		稼ぎ手	両立	家族ケア
父親の役割	稼ぎ手	×	B	A
	両立	(D')	C	(A')
	家族ケア	D	(D'')	×

ダー・ステレオタイプから相当に自由であった。

4. 性役割配分の視点から見た四類型

ここで、A～Dの四類型を性役割配分の視点から理論的に再検討しておこう。論理的には、父親も母親も、稼ぎ手役割、家族ケア役割、そして二つの役割の両立という、三つの位置を取りうる。したがって、表2に示すように、論理的には9通りの組み合わせができるが、両親ともに稼ぎ手役割に特化すれば育児ができないし、家族ケア役割に特化すれば収入がなくなるので、その二つはあり得ないものとして排除される。現実には、残る7通りの組み合わせ（本調査のタイプで言えばA, A', B, C, D, D', D''）がありうる。

Aタイプは、基本的には父親が稼ぎ手役割で母親が家族ケア役割であるという点で、伝統的な性役割を基盤にしており、その意味で「新保守主義的家族」と呼ぶことができる。父親の家事・育児参加度が高まれば、A'に移動していくけれども、男性の負担が重くなるので、常にAに戻る力が働いている。かつて筆者は、統計的な女性の意識調査によってA'タイプへの志向を発見し、「幸福な家庭志向」³⁾と呼んだ（船橋 2000）。

Bタイプは、育児期の母親の就労継続が増加していく「移行期」において、両立を迫られる母親の重い負担にもかかわらず、まだ父親が基本的には稼ぎ手役割にとどまっていた家族ケア役割の取得が充分に進んでいないという状況を示している。そこで、「移行期家族」と呼んでおこう。いわゆる「新・性別分業」である。

Cタイプは、父親も母親も同等に両立を図るという意味で「平等主義家族」と呼ぼう。

Dタイプは、性役割の逆転した配分であるので「ラディカルな家族」と呼べるだろう。しかし、前節で述べたように、常に男性には稼ぎ手役割へ、女性には家族ケア役割へ戻るように圧力がかかるので、非常に不安定である。男性が少し戻るとD'タイプへ、女性が少

し戻るとD''へ、二人とも少し戻るとCタイプへと移行する。Dタイプとは、一種の理想型で、実際にはD'であったりD''であったりしているの、D'とD''も含めてDタイプと括っておく方がよいと思われる。

インタビュー調査の中で見いだされた現実的な基本四類型は、こうして性役割配分の論理的マトリックスの中に位置づけ直され、網羅的なジェンダー・タイプとして再定義された。このことは、以下の二つの意味で重要である。

第一に、本稿で提示する四類型は、単なる机上の論理操作から生まれた類型論ではなく、フィールド・データに根ざした理論的類型である。質的調査からの理論形成を目指すグラウンデッド・セオリーの方法に学びつつ、筆者は、フィールド・データに根ざした理論枠組形成を目指しているが、本調査のケース・サンプリングは、基本類型の抽出という目的に対しては「理論的飽和」⁴⁾に達したと言えよう。

第二に、性役割配分のマトリックスに置いてみると、四つのタイプは固定的なものではなく、常に揺れ動いており、流動的なものであることがわかる。つまり、ジェンダー・ベクトルと対抗ベクトルとでも呼ぶべき、拮抗しあう双方向への圧力が存在する。男性には稼ぎ手役割へのベクトルが、女性には家族ケア役割へのベクトルが、常に作用している。男/女あるいは父/母という性別カテゴリーを使用したとたんに、表2で言えば右上方向に向かってジェンダー・ベクトルが作動する。しかし、それとせめぎ合いながら対抗ベクトルも作動していて、まさにその均衡点で、A B C Dの四類型が現実に出現するのである。

本稿では、価値判断を下さずに、それぞれの類型におけるジェンダー・ベクトルと対抗ベクトルの作用する様相を、冷静に分析していこう。

5. 平等主義家族

まず、ジェンダー平等の観点から理想的と考えられ



る平等主義家族（Cタイプ）の語りを見てみよう。これらのカップルは、どのような意味づけで、職業労働と家事・育児を均等に担っているのだろうか。また、本当にジェンダー秩序から自由なのだろうか。

このタイプの夫たちは、経済的理由もさることながら、妻の職業的能力を誇りに思い、豊かなパートナーシップを求めて、平等な分担を選んできた。

家のローンを半分ずつ背負おうって決めて……子どもが生まれるっていう時、やっぱりこれは共育てで行こうと二人で決めた……じゃあ、やはり家事も半分にしなきゃ、やっていけっこないよね。捉え方が変わって、気持ちが変わって、ま、手足がどこまで動かかっていう問題。……（妻の）非常に実務能力的に高いというか……僕のためにそういう部分をつぶす気は全然しなかった……社会的にみても僕が人を一人浪費している気分にならなくて済む。

（J6 夫）

結婚する時点で、仕事している妻が、何というのかな、やっぱり一緒に家庭を持って、いろいろ仕事の話とかしながら、張り合いのある関係を続けていけたらって思って結婚したところがありますから、基本的には辞めてもらいたくない……経済的なことももちろん半分ぐらいあるんですけど、それが仮に抜きであったとしても、たぶん辞めたらあんまり張り合いがなくなっちゃうかな……いろいろ話をしてわかり合えるような形で刺激しあえればなっていうのが、すごく、そのパートナー像としてあったんですね、昔からね。……何か自分なりの考えを持って動いている女性の方が、女性としても魅力的ですね。

（J8 夫）

妻の方も、平等な家事分担を当然のこととしてパートナーに要請してきた。

（今の分担は）闘いの連続で（できてきた）。（J8 妻）

自分だけが（仕事と子どもの綱渡りで苦労したり）、自分が全部やるとか、そういうことはちょっと考えられなかったんで、すごく、いつも（夫に）ぶつけてきた。（J6 妻）さらに、彼らは、生活や育児の経験をかけがえのない価値と受けとめている。

今は、ね、子どもを育てるっていうのも結構楽しい……子どものインスピレーションというのは（アーティストにとって）おもしろい。（J10 夫）

刺激的……日々現代アート……ほんとにそういう意味ではおもしろい。（J10 妻）

日々の生活こそ大切なもの。（J12 夫）

だが、家庭の心配なく働くことを会社で期待されがちな男性は、女性と対等に家事・育児に貢献する時間を

生み出すために、何とか会社との折り合いをつけねばならない。これは、女性が古くから直面してきた職場と家庭との葛藤である。

聖域なしに、どこもかしこも見なきゃいけない。たとえば仕事だからって言って、そこの部分を聖域扱ってるっていうこともないし、子育てっていうのはって、そこを手つかずにするっていうこともない。最低線……譲れないボーダー……その部分でのよりシビアなぶつかり合いの中で、（……妻に）押しつけて頬かむりして（済ますのではなく）……聖域なしに折り合いをつけていく。（J6 夫）

（今の部署に異動して）3～4ヶ月の頃、上司に一発かましたんですよ。残業はそんなにしないと宣言した……いじめはないけれど……いつリストラがあるかわからない……もしクビになったら縮小した暮らしにする……だからローンを抱えないし、贅沢をしない。（J12 夫）

子どもが生まれたときは、上司に一筆書いて、こういう状況ですから、早く帰る日もありますが、ご理解下さいって、許可得ましたけどね、ま、ほんとに5時が定刻なんで、許可得る必要なんかないのにと私は思っていますけどね。

（J8 夫）

以上のように、平等主義のカップルは、互いに本音をぶつけ合い、周囲の圧力とも闘いながら、「勝ち負けのない、互いに居心地の良い均衡点」（J6 妻）に辿り着いたのだと言えよう。つまり、ジェンダー・ベクトルと対抗ベクトルがせめぎ合っていて、そのバランスの上に実現している平等であり、日々せめぎ合いを経験しているわけである。

実際に、このタイプでは、夫の妻に対する「家事依存度」は極めて低い。ほとんどの家事が折半されており、アーネとロマンによる家事分担タイプ⁵⁾で見ると「平等型」（J6）か「準平等型」（J8, J10, J12）である。

しかし、日常生活を徹底的にシェアしている J6 においても、問題はある。

平日は、もうこれ以上動かす余地がないので、まあ流れていくんですけど、休日の場合は……私は散らかり過ぎているのはちょっと嫌なんで、そうすると自分の方がやらなきゃいけないなくなっちゃう……どうやっても均等にならない。あと非常に細かいこと、名前付けたりとか、そういう衣類の管理の方は私ですね。（J6 妻）

休日の料理は、自然に三分の一ぐらいやればいいやっていう感じになってしまう。（妻が育児休業で家にいた時）僕の方はとたんにたがが外れてもとの流れの方に戻されてし

まう。やっぱり残業があるし……（と甘えてしまう）。

(J6 夫)

共にアーティストのJ10では、睡眠を削ってでも自分の「作品」を出し続ける妻を夫が誇りに思い、生活のすべてがアートに向かって彩られている。夫は妻より早く帰った日や休みの日に得意な料理の腕をふるう。フローリングの床ふきを夫が担当し、妻はその他の掃除と洗濯をする。しかし、男の家事には理由がつけられるが、女の家事の理由は語られないのである。

得意なものをやることにしました。……彼は料理が非常にうまいです。……太刀打ちできない。彼の美味しいものを食べるのが……すごく楽しみ。(J10 妻)

まあ好きなんです、……それにみんなが美味しいと言ってくれるから。……懐石なんか料亭で習おうというところまでいった。……床は男の仕事で、三階まであるからね、全部拭くと最低2時間かかりますね。(J10 夫)

J8では、夫は仕事を集中的に済ませて残業を減らし、早く帰宅して協力しあっており、妻の夜勤時は、家事・育児のすべてを一人でこなしている。それでも不均等はある。

食事に関しては大半が妻ですね……かなり負担かけちゃっているなって……反省してて、私がもう少しがんばらなきゃいけないなって思う。(J8 夫)

掃除は私の方が好きなんです。だから私がやっていることの方が多い。(J8 妻)

J12では、家事・育児は、朝は夫、夕方は妻が担当してやってきた。洗濯や風呂、子どもの病院通いなども折半しているが、やはりどうしても不均等が残る。男性が家庭では整理整頓をしないこと、女性の方が育児優先度が高いことは、一般的にもよく見られる。

ひとつ言えば、(夫は)掃除が嫌いなんです。で、片付けが非常に不得意なんです。それは私は不満がありますけれども、それ以外は別に……(赤ん坊の夜泣きで)眠ったんだか眠らなかったんだか、わからないような状態で学校へ通ってましたので、その時が一番つらかった……。

(J12 妻)

自由時間が減ったことが私には大きいですね。やりたいことができないって。出歩いたり、本を読んだり、音楽や、そういう諸々のこと。(J12 夫)

そうですね、私は子どもができた時点で、そういうことはもうあきらめてしまったところがありますね。自分のためにだけ使える時間は確実に減った……でも、全く何もしていないかといえば、そんなことはない。だいたい気を遣っ

てくれて、見ているから行っておいでとか……。 (J12 妻)

この人、何もしないんですよ、もう子ども子どもで……。

(J12 夫)

以上のように、ジェンダーのベクトルは、平等主義家族の男女においても作用している。家事分担の内容や語り方に、否応なく、女性は人のケアをしたり生活環境を整えたりするものであるというジェンダー秩序が、男女ともに染みついているのである。

私たち二人も、すごい体の中に染みついたものと頭で考えたものでは、もうこーんなにギャップがあって、夫だけは家事をしていて自分はごろごろしているっていうことは、逆はいくらでもあっても、その光景自体が耐えられなかった。(J6 妻)

6. ラディカルな家族

では、性役割が逆転している家族(Dタイプ)の語りを見てみよう。3ケースはいずれも、妻が主な稼ぎ手であり、夫が家事の主要部分を担っている。客観的な数値で見ても、E.D.(お金で見た妻の夫への経済的依存度)とH.D.(時間で見た夫の妻への家事依存度)が共に、はっきりしたマイナスを示している点で際だっている。

このタイプの夫たちは、いずれも職場に対して強い葛藤を抱き、別な道を探していた。

仕事するって楽しいじゃないですか、社会的に責任があって、ある程度の達成感があって、でも、サラリーマンやっているとどんどん時間が流れて、本読む時間もなくなるし、割と考えなくなっていくんですよね、どんどん自分が馬鹿になっていくような気がして、……あと、オモチャ会社に居たんで子ども騙して商売やっているのがしんどかったというのもあるんですけどね。(J3 夫)

新聞記者の仕事がしたいから、ま、続けていたということであって……(職場の地位が上がっていくと)次の十年は自分が考えていた記者の十年ではないと思ったから、だから辞めたんですね。(J5 夫)

上司がひどかった。相性が悪かった。(J13 夫)

一方、その妻たちは専門職で、長期的展望を持って自分の仕事を続けている(J3 助産師、J5 システム・エンジニア、J13 大手出版社の編集者)。だから、夫が仕事を辞めると言っても、動転しない。

[J3] 一緒に暮らし始める時点で、子どもができたなら、彼が育児や家のことをやって、私は仕事を続けたいという話は何となくできていたんですよ。(J3 妻)



どっちかという、仕事に本当にプライドを持っている
かないかの差だったというか、ね、割と助産婦というこ
とで仕事にこだわりをすごく持って働いているのと、僕は
割と普通のサラリーマンでしたから、別に……。 (J3 夫)

(子どもを産むということは) 助産婦しているからには、
経験してみたい……自分たちの(生活の) 態勢というより
は、私の仕事の態勢が整ったんで……。 (J3 妻)

【J5】 一年間、育児休業を取っていたときに、遥かに
楽なんですよ、仕事しているよりも。嫌な人に頭を下げる
必要もあるわけじゃなし、あの一、(職場の) 人間関係
に悩むわけじゃなし。どっちが楽かと言ったら、子育ての
方が楽に決まっているんですけども。たとえば、自己実
現というほどではなくても、ある種の、たとえば手応えと
か、充実感みたいなものが、その一、子育てで得られるも
のと全く違うものが、仕事をしていると得られるし、ま、
そういうものが自分にとってある程度必要だになっていう感
じは、非常にしましたね。 (J5 妻)

(自分が辞めたいと言ったとき、妻に) 結構、結構、っ
て言われたんですよ……(妻も転職するかもしれないけれ
ども) 能力は……まあ、ある人だなあと思っているんで
すよね。ま、周りもその能力を評価するだけのものを備え
ている人材だと思うから、そこそこ稼ぎはある状態は確保
して生きていこうなという、その程度のものはありません
……。 (子どもが一歳直前のとき、新聞記者を辞めた
のは) その時はまあ、ゼロ歳児保育という形で預けること
への不安と……自分は全然関わらなくて、これでいいのか
な一みたいなものもやっぱりあって……(今の仕事はだん
だん) 自分のやりたいことから離れていこうなと……
わかっていたから……それよりはやっぱり折角だから
育児をやってみるかなという思いもあって、辞めました
……自分に正直に決めたら、まあ、そうだった。 (J5 夫)

【J13】 自分で辞めた。基本的に残業が多かった。もう
11時とかざらなんですよ。で、家に帰ってきててもすぐ寝
ちゃうだけで自分の時間が持てなかったし。 (J13 夫)

ひたすら私は転職先を見つけてから辞めてくれていう
ことを条件にして……でも、そこに何が何でもしがみつ
けていう風には思わなかったですよ。 (J13 妻)

再転職のつもりで年末に退職したんですが、次の職場の
内定を取り消されて、失業状態に。 (J13 夫)

結果的には、(ちょうど育休中だったので) 復帰していくの
に) すごく助かりました。 (J13 妻)

彼らは、大半の家事を夫が担っているが、それでも家事
分担に女性領域が残っており、また妻の方に余力が

あれば、家事は妻の方へと流れていく傾向がある。

J3では、授乳以外の育児と掃除・洗濯・食事を夫
が100%担当していると言うが、子どもの洋服を管理
するのは、なぜか妻だと言う。また、妻の産休中は、
すでに夫は退職して育児専念の態勢であったが、それ
でも妻が家事・育児の中心だったという。

J5では、洗濯は半々で掃除は基本的に夫だが、料理
は夫が苦手なので、妻が専らしている。J13では、普
段は全部夫がやるが、離乳食や子どもの病気は、妻が
やることになる。

両方居る日は、要するに同じように両方とも仕事がない
日というのは、作ってよーってなるんですね。 (J13 妻)
平等主義の家族においても検証されたように、家事と
は、自然に女性カテゴリーに吸い寄せられるような
ジェンダーのベクトルを内在させているようだ。

夫たちは、よく見るといわゆる「専業主夫」ではな
く、再就職を視野に入れている。

ただ、僕ももう少しすると(今の子育て生活に) 飽きて
くと思うので、そうしたら保育園(に子どもを入れて仕
事をするかもしれない)。 (J3 夫)

(仕事を) 振り返って、軌道修正をして元のレールに戻
した……それで、見つけたのが臨床心理学という方面で
あったし、そのために大学院に入って……結構、あせりの
ようなもの、ありましたね。このままじゃいけないと思っ
ていたんですよ、大学院入るまではね。 (J5 夫)

やっぱり、もう毎日、仕事は決まったかと私はプレッ
シャーをかけている側なので……(笑)。あの、えーと、
逆の対等じゃないというか、その意味で平らな気持ちにな
れないっていうか……。 (J13 妻)

子ども中心に……そのための時間を作れるような仕事に
就きたい。 (J13 夫)

これらの男性にとって、育児に専念する期間は、仮の
姿にすぎない。家庭生活と調和し、自分らしさが見い
だせるような、よりよい職業人生への転換点と位置づ
けられている。

以上の分析から、仮に性役割が逆転しても、常に男
は仕事に女は家事にというベクトルが働いていること
がわかる。

7. 移行期家族

では、新性別分業とも呼ばれる移行期家族(Bタイ
プ)の語りを見てみよう。このタイプは、お金で見た
妻の夫への経済的依存度(E. D.)は低い、時間で見

た夫の妻への家事依存度 (H. D.) は高い。当然、妻の方にフラストレーションが溜まると予想されるが、実際に、いかにして折り合っているのだろうか。

まず、妻たちは、よその家庭と較べて夫が育児に積極的に参加してくれることを高く評価しており、また、何かしら夫に得意な部分があることに注目し、自らを納得させている。

[J4] 女房に頭が上がりません。……女房なんか、朝4時5時に起きて、仕事して、それから弁当作って、女房の方が遙かに……でも、育児は半々でしたね。風呂はほとんど私が入れました。(J4 夫)

ほんとに、よくやってもらった。オムツもおしっこも何も問わずにすべてやりましたね。(J4 妻)

ああ、やったなあ。楽しかった。(J4 夫)

(子どもが) 戻したものの始末なんかもう上手なんですよ(笑)。(J4 妻)

宴会で慣れてますから(笑)。(J4 夫)

だから、いろいろ言いながら、いやなところはうまく押しつけてやらせちゃったかなあと。(J4 妻)

[J9] 土曜日は、私が勤務のことが多いので、保育園の方が土曜日どちらかがお休みの時は協力してくださいということなので、土曜日は、(夫が) 一人で二人(子どもを) を見ている。……創作料理はうまいよね。だから土曜日は特に何も用意しなくても自分で何か作ってくれる。……(子どもが病気の時、会社を休むのは) 世間のお父さんより多いかも。(J9 妻)

[J16] 家事の分担というよりは、子どもの面倒をとにかくすごく良く見てくれる人なんです。ほんとにもう、子どもにはとことんつきあってくれるっていう感じなので、その間に私が家事をやるっていう感じ。家はもう、それも家事の中に、うん、私は入り込んでいるような気が。……ええ、だいぶ片目つぶりつつ、時々、爆発してる(笑)。……(育児はオムツもミルクも何でもやるけれど) お風呂だけは私ですね。生まれたての子どもをお風呂に入れるのが怖いって言う。(J16 妻)

受け取って拭いて着せてミルクを飲ませてっていうのは僕が。(J16 夫)

もう安心して任せられるので、私はその後ゆっくりお風呂に入れるので……私は結構良い思いをしていると思ってはいるんですけど。……もう、全部。寝間着からオムツから、自分で全部ちゃんと、私が入る前にやるんじゃないかと、入ってから全部ちゃんとやって、ミルクもちゃんと冷まして用意しといてくれて、準備万端整えて待っててくれる。

(J16 妻)

[J14] 私が寝込んだりすればやってくれるけれど、年にせいぜい2~3回。(J14 妻)

仕事時間が長いから……まだ、少年サッカーに関わってられるのは、自分は良い方で、他の子どもたちと接することによって自分の子どもの見えないところが見えて来たりするメリットがあったりするんで……(よその家では) サッカーのバックアップもお母さん中心ですし、お父さんの出番というのも稀ですよ。(J14 夫)

そして、このタイプの妻は、どこかに家事・育児の中心は自分という意識を持っており、もっと夫に家事・育児に参加してほしいとは思っていても、家事折半を要請したり、夫に育児休業を取ってもらいたいとまでは考えない。

私が主導権握って、何か自分でやらないと気が済まないというのも、たぶんどこかにあるんだと思うんですけどね、そんなのも手伝わっちゃって……(父親の育児休業についても) 代替はつくんだから、制度的にはできる。……私なんかは、一年間ばっちり取って母親やりたいう気持ちで、逆に取らせないんじゃないかと思うんですね。(J4 妻)

育児は、夫に取ってもらいたいとは思わない。自分の職場の条件が整えば、自分が取りたい。(J9 妻)

(育児休業について) 何かで話したこともあったんですけど、そしたら、やっぱり食事の世話ができないから、だから、僕は考えられないって。だから、なるほどな。ただの食事じゃなくて離乳食ですから、やっぱり考えられない。(J16 妻)

そういうものだと思う。(家事を) あまりやってもらいたいとは思えない。(J14 妻)

しかし、妻が家事の中心であり、かつフルに仕事もするという負担の多い現状では、自分のやりたいことができないというジレンマもある。

J9は夫婦とも薬学修士で、夫は製薬会社の研究職を続けているが、妻は出産の際に、育児と両立させるために、研究職を辞めて、近所の薬局の薬剤師に転職した。

基本的に、私は、なんか薬剤師はあまりやりたくなかった人なんです。……やっぱり同じ研究とかをしていたので、できればそういうところに身を置いていたかったと言うのが常であって……だからね、そういう被害者意識があるんですよ、どこかに。研究のために今忙しいからって言われると、それは非常に良くわかるんですよ。途中で切れない



とか、今日はどうしても前の日にこうやっちゃったからできないというのは非常に良くわかるんで、そういう意味での理解度は高い……だから自分が行かれない分、せめてそういう世界にいてほしい。ただ会社で同期の女性でやっぱり働いている方とかいらっしやるので、そういうのを聞くと、ああ、もうちょっと、もしかしたら頑張れたかな一つ。

(J9 妻)

ところが、夫の方は研究職を続けつつ、多趣味で、休日には、スキー、楽器、車、サッカーなどに熱中することができる。

レースの大会とかに、私らを置いて、かっ飛んで行ってしまふんですよ。まあ、日々のこともあるので、たまには良しとしなければならぬ。

(J9 妻)

J16 は夫婦とも高校教員で、ともに育児期は自分のやりたいことをセーブしている。夫は、クラブ活動に本腰を入れてチームを強くしたいのだが、休日まで練習をフルに入れると、子どもと関われなくなってしまうので、今はおさえている。

独身の頃で言えば9時頃までやっていたことを……話し合いもあり、見れる時間帯で効果的っていうことを考えて……さらに子どもができて今度は土日とか休みをつぶしても僕はやっていたことを、やっぱり考え方ががらっと変わっちゃって、子どもと過ごしたいっていうのもあって……休日はなるべく練習を入れないようにという風に……ほんとはもっと練習たくさんやって、もう少しレベルを上げて……そういう気持ちも全然消えていないんですけど……家族みんなで……そういう時間の方が貴重なんで。

(J16 夫)

妻も、もっと仕事に関わる本を読んだり、好きな書道を追求したいと思うのだが、とてもその余裕がない。二人ともセーブしているということが、納得の源泉になっている。

J4 は共に中学校教員であるが、夜のつきあいの自由度はアンバランスである。

私の方が女房より遥かに多いんですよ。週に1回、へたすると2~3回。

(J4 夫)

月1ぐらいは、……もう堂々と出してもらっている。

(J4 妻)

以上に見てきたように、このタイプでは、両立問題は基本的に女性問題にとどまっておき、何かと妻が断念する面が多いのであるが、夫の育児参加と、妻の負担への夫の気遣いが、折り合いにつながっていると言える。さらに、このタイプの特徴として、夫の長時間

労働と、家族外部からの強力なサポートが挙げられる。J9, J14, J16 は、夜間も開いていて必要に応じて夕食も出す、先進的な保育園に巡り会っている。J4, J14, J16 には、親族のサポートがある。これらの外部支援が、潜在的な緊張を緩和していると言えよう。

8. 新保守主義的家族

最後に、基本的には性別分業をベースにしている新保守主義的家族(Aタイプ)の語りを見てみよう。妻には時間的ゆとりがある。夫は仕事があった上で、育児に関わり、そして家事も少し手伝っている。仕事と家事を足した総労働時間で見ると圧倒的に男性が長く、不平等が生じているにもかかわらず、夫たちが家庭に払う努力の背景は、何なのだろうか。

まず、理由として挙げられたのは、「育児の大変さ」であった。

(育児は)ほとんどやっていましたね。居る限りね。あれ大変ですものね。

(J1 夫)

次に、男性の「自分の家庭」への思いが挙げられた。J2 の夫は、独身時代が長く、妻子の待つ家庭に帰る喜びを語り、それを大切にしたかったと言う。

(普段は朝だけの手伝いだが、)土日だけ。……子どもと遊ぶのが趣味みたいになっちゃいましたから。子どもを連れ出したりするのは私としては意識してやっていたわけじゃないんです。(妻が)忙しそうだなって感じれば、じゃどこか連れて行こうかという感じで。……何かするのも、一家全員でやろう、例えばキャンプに行くのでも一家全員で行って、一家全員で一緒に時を過ごす、……要するに家族で一つのことをするというのかな、そういう経験をさせたいと思っていますね。

(J2 夫)

J7 の夫は、幼い頃に親が離婚して貧しい環境で祖母に育てられ、高校を退学になり、ようやく今の社長に拾われたと言う。だから、「家庭」に憧れる。

22で結婚してから、30まで遊んだね。31で、もうやめて家建てて、ちょっと変わろうかなって。……俺は亭主関白でいたいんだけど……(妻には働いてほしくない。)俺の給料でね、のんびり、子どもと楽しい家庭をやりたいなって……子どもには、お父さんすごいだぞって、見せたいし、お母さんには、やっぱり父さんじゃなきゃね、やっぱりね、そういう雰囲気ちゅうか、形だけでもね。……妻子を連れて出かけるのが好きなんだ……散歩だけでも、焼き芋焼くだけでもいい。

(J7 夫)

さらに、「夫婦の一体感」が強調された例もある。

買い物はいつも一緒なんです。……こだわって出産して、こだわって育ててきた。……もうほんとにそれこそ買い物も、産褥ナプキンも買いに行ったり、ええ、もうすべて、洗濯も主人がやったという感じで、家の母が仕事してるんで、そんなに手伝いに来れなかったんですが、もう産後もパパが半分みたようなものです。 (J15 妻)

主人が行く道をついていくとか、飛びでないように一緒に行動を起こしていく。 (J17 妻)

信仰上はやっぱり、結婚そのものが神聖だという……夫婦はひとつ。 (J17 夫)

「趣味」という位置づけもある。

ま、僕の気分転換のために。家内を手伝っていると言うよりは趣味みたいな感じ。 (J17 夫)

アウトドアとか、スポーツとか、そういう自分の好きな趣味の方向に、子どもが自分で選んで行ってもらいと、とことんつきあって見てやっちゃう。 (J7 夫)

そして、「妻からの交渉」がやはり挙げられる。

(学校行事への参加は) あ、それ、私が引きずり込んでるんです。 (J1 妻)

(家事は、妻が) やらないからやるみたいところで、しょうがないかなと。……いらいらして態度で示されるから、ああ機嫌悪いなと思うとやらなくちゃとなるわけ。

(J1 夫)

家にいる仕事だと、週に7日で21食作らねばならない。それは負担なので、少しはやってほしいという、そういうことを結婚当初言ったので。 (J17 妻)

なんかケンカしたりとかね……片方がしんどいと思ったら、じゃあこうの方が良いんじゃないかって、その積み重ねがあって至っている。 (J17 夫)

最後に、夫には「技能」も「時間」もあった。

それは消防学校に入ってからですね。何でもやっぱり自分のことは自分でやれって教えられてきましたんで、たぶん、そういったことが影響していると思います。 (J15 夫)

私は23ぐらいからボランティアで養護施設の子どもたちとずーっとやっていますから、子どもとの接し方とか、そういうのはある意味で(妻より)経験豊富というか。 (J11 夫)

公務員だと割に休めるじゃないですか、比較的ね。 (J1 夫)

自由がきく職場なんです。……社員だと難しいかもしれないですけど、私はいわゆる……外注の間人で、ほとんどためらいなく(家族の用で職場から抜け出すのを)

やっちゃっていますね。 (J2 夫)

このように見えてくると、愛情を持って夫が妻子を牽引する近代的核家族の像が浮かび上がってくる。しかし、その家族の生活を保障するために、夫は働かねばならないので、仕事優先の基本は貫かれている。

やっぱり、仕事おろそかというわけにはいかない。家庭と較べようがない。休みの時は家庭重視でがんばるけれど、もう仕事に行ってしまったら……消防士さんだものね。

(J15 妻)

昇進試験を受けないというわけには(いかない)。

(J15 夫)

(受験勉強中は)なるべくいろいろなところに(子どもを)連れ出してね……その間パパ自由にして勉強してっていう感じで……丸一年別行動ですね。 (J15 妻)

したがって、このタイプでは、父親の育児参加や家事参加をあまり引き出すことはできず、「幸福な家庭志向」が現実にはなかなか実現しないため、不満もまた高くなるという矢澤澄子らの指摘⁶⁾は頷けるものである。

9. 結びに代えて

以上の四類型の分析から見えてきたのは、以下の三点である。

(1) ジェンダー秩序の遍在

いずれのタイプにもジェンダー・ベクトルは作用しており、男性の育児参加がそれ自体でジェンダー秩序を変革するとは言えないことが明らかになった。インタビューに協力してくれた家族は、それぞれに魅力的で、愛と生活の知恵に満ちていたが、ジェンダー秩序の力関係と無縁ではあり得なかった。ジェンダーは、職場や学校、福祉国家、マス・メディアなどにおいて再生産されるのみならず、家族の中でも再生産されている。しかし、A～Dのうち、最もジェンダー秩序に対する対抗ベクトルが強いのは、ラディカルな家族であり、最もジェンダー・ベクトルが強いのは、新保守主義的家族であった。

(2) ジェンダー均衡の結節点としての四類型

四類型は分析的類型であり、四種類の家族があるわけではない。個々の家族は、類型間を移動する。例えばJ6は、家族の歴史を辿ると、初めは妻がAタイプを夫がBタイプを志向していたが、相互の交渉の結果、ジグザグを経てCタイプに辿り着いた。また、J16は、たまたま妻が育児休業中にインタビューしたため、B



タイプの特徴が出たが、復職すればCタイプへと移動していく可能性を秘めている。J14は限りなくAに近く、J1は限りなくCへの指向性を持っている。つまり、ジェンダー・ベクトルと対抗ベクトルとのせめぎ合いの結果、夫婦が互いに納得する均衡点として四類型が析出されるのである。これを、「ジェンダー契約」⁷⁾と呼びたい。家族は、「ジェンダー契約」と交渉の舞台である。

(3) 類型間変動論の課題

今後の課題は、この類型分析を基礎にして、個々の家族の類型間移動分析、異なる世代間の変動分析、および異なる家族政策体系間の国際比較分析をすることである。その際、親役割のポリティクスに注目したい。母親であることや父親であることが個人にいかなる影響をもたらすかは、その生きる社会の家族政策と深い関係がある。家族政策とそれに対する家族戦略を多角的に比較検討しつつ、ジェンダー秩序を流動化させる条件を探る必要がある。

なお、本稿では、調査対象の限界から、シングルの親や同性カップルの育児、さらに離婚後の育児について、全く触れることができなかった。今後、ジェンダー秩序を問題にしていくためには、そのようなデータを集めることも重要であると考えている。

<注>

- 1) ここで「ジェンダー秩序」とは、江原由美子(2001)の定義を採用している。すなわち、男性を活動の主体、女性を他者の活動の手助けをするものと位置づける、社会的な性別支配秩序。
- 2) ここで「平等な家事分担」とは、夫の家事時間が妻の家事時間の半分以上あるもので、主要な三つの家事領域(掃除、洗濯、料理)の内の二つ以上をシェアしているものとした。
- 3) 母親は育児優先で、父親は育児と職業とを両立、という組み合わせを望む女性が一定数いることがわかり、その特性を分析した結果、彼女たちが人生の目標を「幸福な家庭を築くこと」としている点から、「幸福な家庭」志向と仮に名付けた。
- 4) グラウンデッド・セオリーでは、質的データから理論を産出するために、各カテゴリーごとに、もはやカテゴリーを生み出す新しい重要なデータが存在しそうでないところまで出来事のサンプリングを進め、カテゴリーの発展が理論的に充分検討されているという状態を、「理論的飽和」と呼んでいる。(ストラウス1990, 訳1999, p.197)
- 5) スウェーデンのカップル間の家事分担を調査研究したアーネとロマーンは、家事分担類型を四つに分けている。「平等型」は、三つの主要家事(料理、掃除、洗濯)を平等

に分担しているもの、「準平等型」は三つのうちの二つは平等に分担しているが一つは女性だけの家事が残るもの、「伝統型」は一つだけ平等に分担しているがほとんどの家事を女性がしているもの、「家父長型」は家事の一部に少しだけ男性が参加するに過ぎないものとしている。(アーネとロマーン1997, 訳2001, p.45)

- 6) 矢澤澄子らは、筆者の「『幸福な家庭』志向」を「二重基準型」と再定義し、新たなデータ収集と分析を行った結果、このタイプの母親が、夫の育児への関わりにも最も強い不満を抱いており、またこのタイプの父親も、育児関与への不足感を最も多く感じていることを発見し、その重要性を指摘している。(矢澤他2003 pp.166-167)
- 7) 「ジェンダー契約」とは、アーネとロマーンによれば(前掲書 pp.251-252)、共働きが普通になったスウェーデン社会で、家事・育児分担をめぐるジェンダー間の交渉が行われた結果、合意される家事・育児分担である。社会的な諸条件が、契約に影響を与える。

<引用文献>

- Ahrne G. & Roman C. 1997 *Hemmet, barnen och makten* SOU 1997 139 (日本・スウェーデン家族比較研究会、ハンソン友子訳2001『家族に潜む権力』青木書店)
- 江原由美子 2001 『ジェンダー秩序』勁草書房
- 船橋恵子 2000 『『幸福な家庭』志向の陥穽』目黒依子・矢澤澄子編『少子化時代のジェンダーと母親意識』新曜社
- 柏木恵子(編著)1993 『父親の発達心理学』川島書店
- 牧野カツコ他(編著)1996 『子どもの発達と父親の役割』ミネルヴァ書房
- 宮坂靖子 2000 『親イメージの変遷と親子関係のゆくえ』藤崎宏子編『親と子—交錯するライフコース』ミネルヴァ書房 (pp.19-41)
- 大日向雅美 1988 『母性の研究』川島書店
- 佐藤博樹・武石恵美子 2004 『男性の育児休業』中公新書
- 三具淳子 2002 『カップルにおける『経済的依存』の数値化』『家族社会学研究』Vol.14, No.1. (pp.37-48)
- Strauss A. & Corbin J. 1990 *Basics of Qualitative Research*, Sage(南裕子監訳1999『質的研究の基礎』医学書院)
- 矢澤澄子、国広陽子、天童睦子 2003 『都市環境と子育て』勁草書房

(ふなばし・けいこ 静岡大学教授)